

第2章 震災の教訓 東日本大震災10年を経て

- ① 原発を「許容していた」私
- ② 震災と責任の丸投げ
- ③ 立憲的に動けぬ国家よ
- ④ 失敗情報の「知識化」こそが、事故や失敗を未然に防ぐワクチン
- ⑤ 原発事故の原因 欠けていた俯瞰と総合
- ⑥ 大震災、国の記録 政治家の気迫伝わるか
- ⑦ 公文書の不在 根幹に政治の不在
- ⑧ 原発事故と原爆 彼岸から語りかける理性

第3章 「公共の守護者」としての天皇像 天皇制に何を求めるか

天皇と国民をつなぐ「神話」の解体のためには
 今こそ皇室典範=皇室法改正論議を
 歴史の大きな分水嶺だった元号法制化 天皇が譲位する国で
 「国民の総意」に立脚し、変容を迫られる天皇の地位
 国体と言う言葉があった時代、その時軍部は



天気の良い日は日光浴を兼ねて玄関で新聞や本をじっくり読むのが楽しい日課 (田所さん)

第4章 戦争の記憶 歴史は戦争をどう捉えたか
 歴史見直しに消極的な日本、「復元」のポイントはどこに
 内村鑑三が見通していた戦争の本質とは
 焼かれなかった1枚の付箋が語る敗戦処理の真実
 早すぎた日本の戦後構想 二つの世界大戦に見る
 第一次世界大戦は日本社会にいかなる衝撃を与えたのか
 「12・8」を迎えて思う、通謀で削除された開戦の意図
 史実と向き合い、歴史の「長い記憶」を学ぶ
 戦争の本当の理由と国家からの説明はなぜ異なっていたのか
 9条の意義、見つめ直すべき時
 井上ひさしが追いつけた「かけがえのない秘めた笑」

第5章 世界の中の日本 外交の歴史をたどる

- ① 権力篡奪への「正当性」をまとう、議会と暴力の関係性
- ② 新型コロナと対中戦略 焦燥感より冷静な「構想」
- ③ 変容を始めた安全保障、注目されるサイバー空間の「国防」
- ④ 中国大陸の東、太平洋の西に位置する日本から中国を見る
- ⑤ 中国外交の特徴を歴史に学ぶ
- ⑥ 対日参戦は国際共同行動の結果と捉えるソ連の歴史認識との深い溝
- ⑦ 経済変動と歴史 近代400年の終わりに
- ⑧ 日本と日本人 その自己イメージは性格なのか
- ⑨ 幾つかの日本人像 アナーキーで巧妙で
- ⑩ 防災と国防 どう激烈の度を増すのか
- ⑪ 孤独恐れる時代に 日々の風景、変わる体験を

第6章 歴史の本棚

I 国家に問う 情報公開法・公文書管理法の空洞化を憂慮する
 「国家と秘密 隠される公文書」

- ① 低い姿勢で時代と対峙し解析する
『思いつきで世界は進む』
- ② 「『遠い地平、低い視点』で考えた50のこと」

5面右上に続く

- ① 巨大インターネット企業が、政治と結びつき人々を監視し、老い命させている。自由、権利、民主主義をなし崩しにしている。
- ② 資本主義はアメリカに代表される「リベラル能力資本主義」と官僚による支配・法の縛りの欠如・国家による統制と言う特徴を持つ、中国に代表される政治的資本主義がある。いずれも深刻な腐敗・汚職などと不平等を伴っている。これらを克服し「平等主義的資本主義」へと移行していくためには、富裕層への増税・公教育への公的支出の増大・政治への資金提供の厳しい制限が必要である。
- ③ 民衆の消費行動・新しい商品への欲望が民衆自身を自己破壊している。
 打開策は公共性と言う点であり、それを実現できる賢明さを私たちは持たなければならないと説く。

最近の著書として、「『日本』ってどんな国？」(ちくまプリマー新書)がある。
 豊富なデータに基づく国際比較で、家族、ジェンダー、学校、経済などを比較し日本の姿を分析。ジェンダー不平等、長時間労働と非正規社員の低賃金、投票率の低さなど日本の異常さとその背景を分析。オンラインも活用した若者の行動に期待している。

なお彼女は、日本共産党を「ぶれないのに柔軟。強いのに優しい。理知的なのに温かい」と高く評価し、野党共闘のもと躍進することを期待している。

加藤陽子 東京大学大学院教授 日本近現代史専攻

歴史学とは無縁でも、日本学術会議問題でその名を知った人は多いだろう。
 東京大学の学生時代に、女性への抑圧を強く感じ、自立するには研究者になるしかないと考え、学者になる道を選んだ。

主な著書「徴兵制と近代日本」「戦争の日本近現代史」「満州事変から日中戦争へ」
 「戦争の論理 日露戦争から太平洋戦争へ」「昭和天皇と戦争の世紀」「天皇はいかに受け継がれたか」
 「それでも日本人は『戦争』を選んだ」「太平洋戦争への道 1931-1941」など。一番新しい論文は雑誌『世界』2012・12の特集「学知と政治」掲載の「現代日本と軍事研究」等
 ここでは「この国のかたちを見つめ直す」をやや詳しく紹介する。

司馬遼太郎は「坂の上の雲」で明治時代を高く評価していたが、日露戦争後の「戦争する国」への転換に失望し、その反省から「この国のかたち」を書いた。本書のタイトルはこれを踏まえている。司馬に批判的な大江健三郎の著作は全部読んでいる。

「この国のかたちを見つめ直す」 (毎日新聞出版 2021)

6つの章に分かれたこの本は、毎日新聞に掲載されたほぼ3種の文章からなっている。月1回連載の「時代の風」というエッセー(2021～)、「加藤陽子の近代史の扉」というコラム(2020～)、「今週の本棚」という書評。そして前書きの最後に「危機の時代には、国家と国民の関係を国民の側から問い返して、見つめ直すことが必須となる」

第1章 国家に問う 今こそ歴史を見直すべし

- ① コロナ禍への最良の方策を求めて 為政者・専門家・国民をつなぐ鍵とは
- ② 五輪開催の可否は科学的知見で 国内外への説得の論理——終戦の詔勅から
- ③ 公的学術機関の専門性・人選の自立性を憲法が保障する理由 歴史から考える
- ④ 個人が尊重されるかどうか 国民世論のありか信頼
- ⑤ 自己への揺るぎない評価軸を得るための二つの途
- ⑥ 新型コロナ対策の検証には議事録が不可欠 失敗を繰り返さないために
- ⑦ 国民世論が検察に立ち向かった時
- ⑧ 科学技術政策の適正な舵取りを求めて 科学はボトムアップから
- ⑨ 政治の姿勢を歴史に刻むため、「実」より「名」を取る 説明なしの任命拒否、その事実と経緯を後世に残すために
- ⑩ 危機の時代に必須の政治指導者の資質とは
- ⑪ 学術会議問題の政治過程 世論が政府の姿勢を「変えた」

左上に続く